



(大阪東南部)

大阪・佐堂遺跡

- 1 所在地 大阪府八尾市佐堂町・東大阪市金岡町
- 2 調査期間 一九八一年(昭56)七月～一九八三年(昭58)九月
(予定)
- 3 発掘機関 財大阪文化財センター
- 4 調査担当者 三宅正浩
- 5 遺跡の種類 水田跡・集落跡・河川跡
- 6 遺跡の年代 弥生時代中期～鎌倉時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

佐堂遺跡は河内平野のほぼ中央部にあり、旧大和川(長瀬川)の氾濫原および自然堤防上にひろがる遺跡で、遺構・遺物は、現地表(標高八m)下四～五mの深さまで、弥生時代前期から現代にかけて堆積した砂、シルト、粘土面において確認されている。検出された遺構の内訳は主要な

ものだけでも、(一)弥生時代中期水田跡、(二)古墳時代前期集落跡、(三)古墳時代中・後期水田跡、(四)飛鳥・奈良・平安時代初頭の河川跡、(五)平安時代末～鎌倉時代の集落・水田跡などがあげられる。

さて、木簡が出土したのは青灰色シルト面に自然に形成された幅四m、深さ〇・四mの浅い流路で、流路内に堆積した粗砂層から若干の自然木とともに一点出土した。出土状態からみて水流によって流され、砂や自然木類とともに流路内に堆積したものと考えられる。しかし、木簡そのものには風化の痕もみられず墨書もかなり鮮明であることから、流路内に堆積した砂層に混入するまでさほどの時間を要しなかったものと推測される。

また、層位的には流路の検出面である青灰色シルト層は極少量の遺物しか含まずその時期は明確ではないが、平安時代初頭の土器を含む暗灰青色シルト層が上面を覆って広がっており、下層の暗灰色粘土上面では古墳時代後期の水田跡が検出されている。

一方、このような流路は地点を変えて数箇所で見られ、これらの主流ともいえるべき幅三〇mを測る河川内からは七世紀末～八世紀初頭を主体とした須恵器・土師器が出土しており、中には判読できなかったが数点の墨書土器が認められている。

8 木簡の积文・内容

〔種カ〕
田五十戸奈×

(108)×(29)×4 039

「五十戸」の表記がみられる荷札で、「種田」の地名は『倭名類聚抄』には認められない。また荷札上端の切り込み部分だけでなく、表面にも紐の痕跡が残されており、貢進する荷物にかけた紐に挟み込んで使用されたことがうかがわれる。

なお、木簡解読については平城宮跡発掘調査部史料調査室の御指導と御援助を受けた。さらに佐藤信氏には種々の御教示をえた。

(三宅正浩)

大阪・大坂城三の丸(大手口)遺跡

- 1 所在地 大阪府大阪市東区大手前之町
- 2 調査期間 一九八一年(昭五六)四月～一〇月
- 3 発掘機関 大手前女子学園校地学術調査委員会
- 4 調査担当者 藤井直正
- 5 遺跡の種類 近世城郭跡
- 6 遺跡の年代 安土桃山時代～江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

大坂城は、天正十一年(一五八三)豊臣秀吉によって築城が開始されたが、慶長一九年(一六一四)の大坂冬の陣、翌元和元年(一六一五)の大坂夏の陣によって落城した。その後、元和六年(一六二二)徳川幕府によって再建されたのが現在にのこる大坂城の遺構である。豊臣時代の大坂城は、本丸・二の丸を中心に、その外側には広大な三の丸の地域がひろがっていたが、現在では市街地となっている。

従来、三の丸にふくまれる地域において木簡の出土例があり、一九八〇年(昭五五)には、外濠の北側に当たる追手門学院大手前高等学校・中学校の敷地からも、発掘調査によって六点が出土し、これについては「大坂城三の丸(京橋口)遺跡」として本誌第二号に報告した。今回の調査でも新たに木簡一二点が出土した。